

大型クラゲ分布調査

(有害生物出現調査並びに有害生物出現情報収集・解析及び情報提供委託事業)

森脇和也・沖野晃

1. 大型クラゲ沖合域分布調査

(1) 調査方法

平成28年9月6日～9月9日に、調査船「島根丸」により LC ネットを使用してエチゼンクラゲを採集した。また、ブリッジから目視調査を行った。

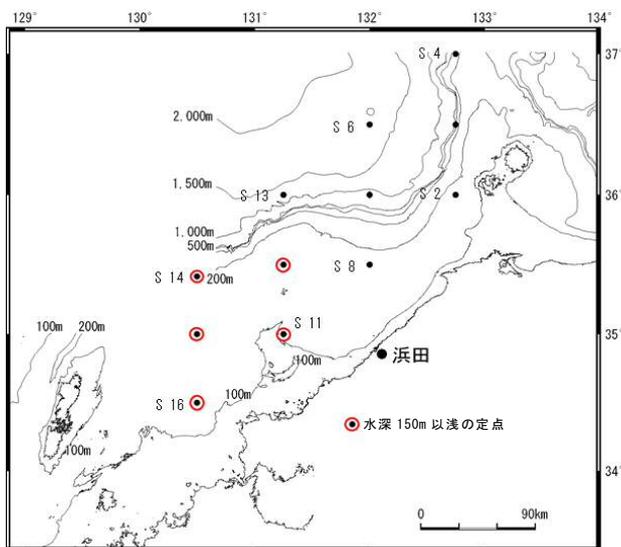


図1 洋上分布調査定点 (丸は水深 150m 以浅)

調査定点は図1のとおりである。調査に用いた LC ネットは網口の幅×高さが 10m×10m で、調査海域の水深によって分布層が異なると思われるため、下記のとおり水深によって曳網方法を変更した。

- 水深が 150m よりも深い場合は LC ネットを水深 50m まで沈め、水深が 150m よりも浅い場合はおおむね海底から 20m 上まで沈める。
- LC ネットを予定水深まで沈めた後、ワープの繰り出しをストップし、1分間斜め曳きをする。
- 揚網はワープの巻き上げ速度を毎秒 0.3m、船速を 2～2.5 ノットで行う。

(2) 結果

採集結果は付表1に示した。

今回の調査では、LC ネット採集、目視調査ともに確認されなかった。

2. 洋上目視調査

(1) 調査方法

①調査船「島根丸」

船上から目視による観察を行なうとともに、水温、塩分等の海洋観測を実施した。調査は7月に1回実施した。調査定点は図2に示すとおりである。計数は、各定点から2マイルの距離を航走する間、船橋上両舷から目視されたエチゼンクラゲを大(傘径 100cm 以上)、中(傘径 50～100cm 未満)小(傘径 50cm 未満)のサイズ別に行った。

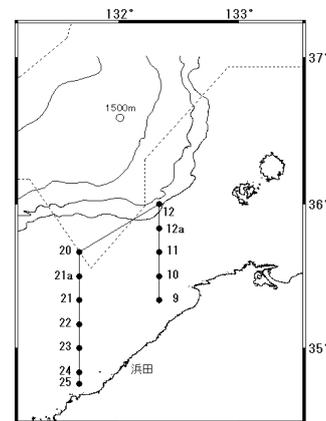


図2 島根丸洋上目視調査定点

また、漁業取締船「せいふう」により航行中に沿岸域のクラゲ来遊状況の調査を行った。

(2) 結果

目視観察結果を付表2に示した。

「島根丸」による調査では確認できなかった。また、「せいふう」からは合計 19 個体の目撃情報があった。

3. 陸上調査

(1) 調査方法

漁業協同組合 JF しまねからの来遊状況の聞き取り調査を実施した。

平成 28 年 7 月～12 月の間、各 JF しまねへ直接、もしくは各水産事務所を介して電話により情報を収集した。

(2) 結果

聞き取り調査の結果を付表 3 に示した。

7 月末から定置網漁業を中心に出現が確認され、最大で 1 日当たり数十個体が確認されたが、いずれにおいても漁業被害が出ることはなかった。10 月に入るとほぼ収束した。なお、聞き取り調査の結果は大型クラゲ被害防止緊急総合対策事業において JAFIC が実施している大型クラゲ出現情報にデータとして提供した。また、大型クラゲ情報として FAX と水産技術センターホームページ上で情報提供を行なった。

4. 総括

平成 28 年度の大型クラゲ出現量は、27 年度を上回ったものの、漁業被害は無く、平成 23 年度以降少量で推移している。

JAFIC や日本海区水産研究所は、近年大型クラゲの来遊量が少ない状態が続いているものの、再び増加する可能性もあるので各県に注意を呼び掛けている。